

ユーカラ劇、欧州旅行と川下りプロジェクト

千家盛雄

2024年9月25日、26日

聞き手：谷地田未緒、笹村律子（前半）

構成：谷地田未緒

——：今日はよろしくお願いします。ここはお店の二階なんですね。

千家：「チヌカラクル」というのが店の名前で、それはアイヌ語で北極星（を見る人）という意味なんだ。100年、150年前に本州から北海道に来るときは、道路も飛行機もないから舟で来る。だから北極星をみて方角を知ったんだ。これは萱野茂さんに名付けてもらったんだ。

——：そうなんですね。今回はユーカラ座のお話をお伺いしたくてお邪魔しました。

千家：ユーカラというのは、何万年も前から、命ある者すべてにお世話になって、いまここに人間「アイヌ」が生き抜いてきたということを物語るんです。命あるすべてのものにお世話になって、自分たち人間がいま生き抜いてきたんだということを忘れてはならない。そして自然界のことを、神々の世界とって感謝してきた。これはアイヌ、つまり人間の物語なんだから、白人だ黒人だといってるわけじゃない。あなただって、シャモ（和人）とかシシャモとかそういうことではない。人間だとしか言ってないんだ。いま戦争だ何だといって世界ではいろんなことが起きているけど、そういうのはもう人間なんて言わないんだ。

ほらここに、「人権を守る心が平和を作る」と書いてあるけど、これは国連憲章というもので、丹葉（節郎）のおじさんが書いておいて行ってくれた。まりも祭りも作った人だし、パリも一緒に行った人なんです。そしてユネスコのことや国連のことを釧路で初めてやったのが丹葉節郎という人で、その人と山本多助という人が、阿寒湖のまりも祭りを始めたんです。一人一人の人権が守られて初めて世界の平和につながるというのが国連憲章なんだ。ユネスコ憲章というのものもある。ユネスコ憲章は何ていつているかということ、戦争は一人一人の心の中から生

まれるものであるから、一人一人の心の中に平和の砦を築かなければならない、と。ユネスコは世界遺産（の一覧）を作るために作られた機関じゃないんだぞ。戦争というものは、戦っている人たちだけが殺したり殺されたりしているのではない、本当に困って苦労しているのは陰に居る家族や子供たちなんだ、だから戦争というのはやってはならないし、二度と戦争をしてほしくないというのがユネスコ憲章なんだ。

——：ユーカラ座はパリのユネスコ本部で公演されていますね。

千家：パリでは国連本部へ行行って、北海道のアイヌはどういうことを考えているかということを、丹葉節郎さんや、いろいろな方と一緒に訴えたんです。丹葉節郎という人は、釧路の公民館長を17年やった人で、釧路育ちの教育者。戦時中に東京で学校の先生をやっていたけれど、戦争をしていると教育ということはさっぱりできないんだと言っていた。時間を惜しんで勉強をしていた教え子たちが、全部戦争に取られてしまった。戦争が終わったあともみんな亡くなって帰ってこなかったそうです。それでも教育というものはしたくないと言って、辞めて釧路に帰ってきたんです。それで釧路の公民館長を17年やった。この間に、戦争というものだけはやってはならないといって釧路でユネスコ協会の活動を始め¹⁾、それで鶴居村というところにユネスコ村というのを作り²⁾、そこに山本多助の碑も作った。

日本が戦争に負けた後、イギリスやフランス、いろんなところから（阿寒湖アイヌコタンに）人が来た。私はアイヌ部落³⁾で、「アイヌ文化保存会」というものの事務局長をやったんです。四宅豊次郎が会長をして、自分はお金を仕切ることをしていた。だからそういうお客さんが来たときにも迎え入れていた。ユーカラ座を作った時、団長というか劇の一番ボスが床ヌブリだった。いとこなんだ、私の。そしてその下の事務局長というのが四宅豊次郎といって白糠出身の頭のいい男の人。3人でアイヌのユーカラというものを、どうしたらいいか相談したのよ。

第一回のユネスコの大会⁴⁾というのが札幌であつた時に、丹葉節郎さんが阿寒のアイヌを連

れていったんだ。その時、床ヌブリ、四宅豊次郎と俺がいったんだ。その3人が行ったから、ユネスコが何をしてるかも知って、何かやるんならやっぱりユーカラじゃないかと。

それでユーカラというものを勉強するために萱野茂さんのところにいて、ユーカラというものはどんなものだろうかと。ユーカラというのは人類創生の話で、太陽神が一番上で、その弟が雷神なんだ。その雷神が天から地球上を見たらものすごく素晴らしい木が生えていて、炎になって降りかかった。そこで炎が燃え上がって、初めて地球上に火というものが起きて、その火が消えたら真っ黒くなって木が燃えた淵から草が生えた。それが地球に最初に生まれた火の神の子供達で、そこから人間の祖先であるアイヌラックルも生まれた。だからユーカラに出てくる最高の神は太陽の女神で、イレシュサポ⁵⁾という太陽神の7番目の妹がアイヌのユーカラに出てくる。だから世界中にあと兄妹が7人いるんじゃないかと萱野さんがいったんだ。

——：最初は「コタンの森」というタイトルだったんですか？

千家：説明したら長くなるけど、アイヌでない札幌の学者連中とかが、「コタンの森」というタイトルでアイヌのユーカラの劇みたいなのやったわけよ。だけどアイヌから見たら、ただそこら辺の踊りかなんかでやったもんだから、「何が『コタンの森だ』」って、「どこのコタンのこと言ってるんだ」と、アイヌ文化を、人をバカにしたようなことをやって、何を考えているんだっていう風に怒って。それ以前に既に知里幸恵が東京に行って、金田一京助のところユーカラを本にしたから、みんなユーカラのことを知った。阿寒でもアイヌでない学者のひとが来て、四宅さんのばあちゃん(ヤエさん)のアイヌのユーカラを聞いて本にして、儲けた奴もいる。それで自分たちでユーカラ劇っていうのをやることになったんだよ。それで床ヌブリと四宅さんが俺に、「盛、なんかなんねえか」というから、「歌とか録音とか、全部俺にいったら録ってやる」って。それで3人で相談して、ユーカラをやるんだったら、ただ勝手に阿寒湖だけでやったらまた北海道中のアイヌから文句くるべと思って、北海道アイヌ協会というところに

行って、旭川、札幌、日高とかに「阿寒のアイヌが、阿寒のユーカラというものをやるけど、旭川でも札幌でも、何かある時には必ず協力するから」と言ってもらった。

そのころアイヌの部落に来ていたバスのガイドさんがいて、足寄とか弟子屈とかにいてる人なんだけど、その人が、「阿寒湖のアイヌのことについてお客さんに聞かれるけど何にもわかんない」って相談にきたんだ。「じゃああんなたちは何しにコタンに来てるんだ」と聞いたたら、「コタンにはトイレがあるから来てる」という。それで、「アイヌコタンには色々あるけど、阿寒の(アイヌの)歌とか踊りとかを見れないものかと思って」と。トイレだって高い金出してアイヌ部落で作ったのにタダで使ってるのかと冗談言いながら、「阿寒まできたらアイヌの踊りとか見ないと」ということでさ。

——：そういう話があって1970(昭和45)年の「アイヌ観光センター」のオープンにつながるんですね。ここに常設される舞台上で上演することを前提にユーカラ劇を練習していたと新聞にありました⁶⁾。ところでユーカラ座では、千家さんのご担当は何だったんですか？

千家：俺は音響効果と照明を担当してて、全部私が仕切るわけよ。向こうの音出す役のひとに、「はい、ここでこうするから、ここでこれやって」と指示したらそこにいる人たちがやってくれるんだ。私は音響効果が好きで、こういうもの(自宅の壁にある大きな蓄音機型のスピーカーを指して)つくってるもんだから。だから私が作った音を流してんだ。アイヌ部落の女性たちを集めて、ここからこうしてくれ、ここの歌はこうしてくれって言って、俺が録音したんだ。フタレチュイからフククンから、ラックルのまで。

——：ユーカラ劇には、ムックリの音が長い間響き渡るシーンもありますね。

千家：それ(ムックリ演奏と録音)は私がやってるんだよ。

——：千家さんは昔から音楽が好きだったんですか？

千家：もちろん。ムックリもいろんなものを自分で作ってるから吹くこともできるんだ。録音する機材もスピーカーも全部自分で揃えたもんだ。マイクもいいのも持っていてさ。ここの部屋で

俺がムックリやって豊岡（征則）がギター弾いて、それで録音したやつをユーカラ劇で使ったりもしたのさ。

——：照明はどこで覚えたんですか？録音とか、写真や映像を撮るのは、自分で機材を買っているの試してみることができると、照明は会場に行かないとわからないからなかなか覚えるのも大変ですね。

千家：ユーカラ劇も、札幌、網走、旭川といろんなところでやったけどそういう時に、ステージっていうものはどういう風にやるかっていうことを先に全部打ち合わせやるわけよ。いまこれからこうやって踊りが出てくるから、その時には最初に踊っている人たちを撮る時にはそのまま追って、次に出てくる人を次の（二つ目の）カメラで撮らないと映像にならないんだとかね。アイヌ部落（の観光センター）に照明の機材とか買うときも、私が商売人と呼んで、このステージでひとりひとり出てくる時はあそこの入り口とここの入り口から出てくるから、両方に向けないといけないんだとか、ここは高いところから明かり出してくれとか相談して。

白鳥姫が出てきて踊るシーンでは、（その役者さんに）「（客席の）ずっと後ろの高いところに、光が出てるところが見えるでしょ、あそこに私が居るんだよと、ちゃんとあんたを見て光を出してるから、踊る時には、まず下の方のお客さんを見て、そのあとは高いところの一番遠くのお客さんの方もちゃんと見ないとダメだから。全体を見て、そして最後終わる時には、私の居るところを見て、ちゃんと挨拶するんだよ、そうしたら私がちゃんと照らすから」って言ったら、ちゃんといった通りやってくれたんだよ。

——：白鳥姫の大事なシーンですね。

千家：そう、アイヌラックルって人間臭い神様、人間の最初。そのラックルが「弓を持って後ろからじっと、あんたが踊っているのを見てるから、後ろから見られているということわかって前を見るんだよ」と。カンナカムイのシーンでは、二人が出会ったところで真ん中の強い光をわっと明るくして、周りの灯りを暗くするんだ。そしたらガラガラガラっていう雷の音を出して、それで灯りをスーッと消していく。

——：雷の音はどうやって録ったんですか？

千家：NHK 釧路の放送局にいて、そういう効果音とかが全部あるから貸してくれって言って録音したんだ。ムックリの録音はマイクのそばにいたら音が大きすぎるから、少し離れて「ビヨン、ビヨン」って。そしてリズムに乗ってきたらマイクを近づけたりして。そんなことやってる人なんか当時いなかった。

——：ユーカラ座に出てくる、ユックカムイの面は瀧口政満さんが制作されたと伺いました。

千家：瀧口くんは耳が聞こえなくて話もあまりできないから、山本多助のところで木彫りをやってたとき、俺も床ヌブリとかも木彫りやってたんだけど、俺はずっと面倒見てたんだ。

——：本当にみんなで手作りで舞台を作ったんですね。

千家：そうだよ。だから面白いんだ。

——：いよいよパリに出発です。中身はできたけど、渡航はきつといろいろ大変だったことでしょう。

千家：ユーカラ座のときは俺もだいぶ資金出したんだ。あとは北海道中いろんなところから少しずつ金を集めて、それで出発していく時に、札幌の空港まで行ったら、「東京でのみんなのホテル代、千家さん立替で払ってきてくれないか、パリまで来たら払うから」と言われた。もともと余計にお金を持って出発したから、女房に「何に使うんだ！」と怒られたんだけど、「向こうに行って何かあって、病院に入るんだなんだとなっても金がないと困るから」だと説明してたんだ。そうしたらそれを出発する前に使うことになった。それでパリまで行ったら行っただ、全部で20人以上もいるもんだから、荷物もたくさんあって大変なんだけど、電車に乗るときにもお金（チップ）を渡して荷物を運んでもらったり、そういうのも俺がやってたんだ。そういうときに渡すためにタバコとかもわざわざ持っていくたし。フランスについたら、川を船で昇っていくんだ。みんな乗せて。俺はその前に行ってきたからチップとかもわかってたし、皆を案内したんだ。

——：ユーカラ座の前にも行ったことがあるんですね。やっぱり一度ご自分で行った経験がなかったら、なかなか他の人を連れて行くのは大変ですね。

千家：行けない、行けない。連れてったってどうするんだか自分がわからなかったら大変だ。床ヌブリも外国が好きだったので、(ユーカラ劇でパリに行く前に) 2人でヨーロッパ8カ国を1ヶ月かけて回ってきた。日本旅行の第一回の海外ツアーっていうのに参加して⁷⁾。木彫り彫刻家なんていうのは私と床ヌブリだけで、あとは札幌とか旭川、函館の大学生とか、そういう人ばかり、20人近くいた。2人でヨーロッパをずっと回って勉強してきたんだ。だからそのあと、ユーカラというものをやる時に、「フランスまでいってやったら世界が認めるんだ」ということを2人で決めたんだ。

——：この旅行は、ユーカラ座でパリに行く、何年くらい前ですか？

千家：10年くらい前でないか。

——：ユーカラ座もその前のヨーロッパ旅行も、海外旅行が一般的でない時代に、いろいろと大変だったことでしょう。

千家：旅行の方は資金は自分たちで稼いで払ったんだ。運転手の給料が6000円くらいの時代に、(ツアーの料金が) 45万円。私はその前、太平洋炭鉱というところに3年働いていたんだ。その3年間坑内にはいって危険なところで仕事して仕事して、貯金して、30万円くらいもってた。それで俺は英語もなんぼわかるんだ。なぜかというと炭鉱に3年入ったとき、中で使う機械が全部ドイツの機械で、シャトルカーとかホイストとか、そういうのをいっぱい覚えて資格取らないとその機械を使えないんだ。それで炭鉱に入った時に、うちは貧乏で俺は小学校も行かなかったんだけど、炭鉱も仕事してもらわなきゃならないから資格取ってほしくて、わかりやすく全部説明があるわけ。そこでいろんな勉強して10個以上の資格取ったらすごい給料高くなるんだ。普通1日800円くらいの時に俺は1200円ももらってたんだ。その中に怪我人の面倒みる資格とかもあるんだ。足折ったらどうするか、血が出てたらタオルで止めてから病院に行くんだとか。それで資格取って、坑内で働いて、金貯めてヨーロッパに行った。一緒に行ってるのは大学生とかで、俺や床さんはそいつらより歳はなんぼか多いけど大学なんか行ってない。そういう人たちがへんな英語喋ってる時に俺た

ちは「カフェオレ、ワン」とか、フランスだったら「サバ、サバ」って言ってたんだ。

それでその45万円には、東京まで行く分は入ってなくて、貯金だけでは足りないから、阿寒で銀行で借りて(ツアー会社に) 支払うお金はなんとかしたけど、今度はいった先で使う金がないので、親戚にも借りて。ヨーロッパに1ヶ月も行くんだっていうので、ここの商店街でも人集めて、みんなでお祝いしてお金も集めてくれたけど、それでも足りない。

——：そこまでしてまで、どうしてヨーロッパに行きたいと思ったんですか？

千家：なんでと言われたら、ヨーロッパって、イギリスでもフランスでも、アイヌのこと研究に(阿寒に) 来るわけよ。それにいろんなことやってたから、ヨーロッパに行ってなにかしたいなあと思って。それで飛行機で2日くらいかかって現地に着いて、フランスのセヌ川を船で回っていたら、アレクサンダー3世橋っていう、ロシアからフランスに贈られた橋に、アイヌのユーカラで出てくる太陽の女神とまったくおんなじような太陽の女神の彫刻がついてるのさ。私はカメラマンだから、そういうのも全部写真に撮った。

——：どんなところに行ったんですか？

千家：有名なところは全部行った。ムーラン・ルージュとか、リド⁸⁾とか。(ステージの) 女の人、みんな裸みたいなもんで、20人くらいが音楽に合わせてばんばん踊るんだ。ふつうなら団体で入っていくところに、俺たち個人で行ってるから、どっか後ろの方の空いてる方に座らせようとするから、案内してる人にチップやったら、ずっと端っこに行ったのにぐるっと回ってきて一番前に座れた。それで音楽入って、ちっちゃいパンツの女の人たちが、バンバン踊るんだ。いやあ、一番前の席だとどこ見てもいいかわかんないくらい。

——：オペラとかバレエとかそういうのも見たんですか？

千家：バレエやなんかは時間かかるし、いろいろとうるさいんだ。服装はどうか、履くものがどうか、お昼はここで食べなきゃならないとか、それがまた5千円も1万円もするようなところで。それで食べたたらまた午後から見るとかいつ

て、そんなことやってられないって。

——：なるほど。じゃあやっぱりキャバレーの方が気楽ですね。踊りを見たのはそのくらいですか？

千家：ムーラン・ルージュとかリドとか、あとは向こうの王様とかが住んでた城の中に金払って入って見たりとか。デンマークなんかは、北海道と一緒にだった。木彫りの家で、階段やなんかも、「俺ら作れるよな」と床ヌブリと二人で話したり、そこでカムイノミしたら、一緒に行ってる20人くらいがそれをみんな見るわけよ。外国で運転できる車の免許もとって。北海道では大型二種（免許を）もってるんだけど、外国でも運転できるようにと思って自動車学校行って。どこだったかな、車借りて運転した。車の扱いはいいんだけど、道が左右逆なんだから、やっぱり乗れないね。あとは大学で木彫りやってる人たちのところにも行った。大学行ってる間、4年かけて1つのイエス・キリストの像を作るんだって。通訳つけてくれて話したら「お宅さんたちも彫刻家でしょ。お宅さんたちだったらどのくらいでこれ作れますか？」と聞かれて、丸太から掘り出しても、10日くらいあればできるんでないか、丁寧に作っても1ヶ月はかからないんじゃないべかと言ったら、びっくりして、「10日?!」と。それでまな板とか、そういうものも彫刻されてるものがあったんだけど、「こんなもんだったら1日で100枚くらいつくってやる」と。

私たちがイギリスとかフランスとかいっているいろいろ勉強してきたから、ユーカラ劇も、みんなを連れて行けたんだ。ユーカラ座ではパリのあと、台湾、香港、沖縄にも行っている。台湾は台北でアイヌの舞台をやって⁹⁾。日本人って何にも手前の国のこと知らないで、外国に来てみて初めて日本の良さというものがわかるんだということも勉強させてもらった。

——：帰ってきた後、手作りの丸木舟で川を下るという壮大なプロジェクトをやってらっしゃいますね。

千家：私がアイヌ文化の勉強をするために、豊岡征則というのと二人で屈斜路湖で丸木を倒して丸木舟を作って、屈斜路湖から釧路まで川を下るかということになったんだ。そのとき、木を倒すならカムイノミから勉強しなければならない

となって、萱野茂さんに教えてもらいにいったんだ。それに札幌テレビがそれを映すからというのもあって¹⁰⁾、萱野さんもテレビでそんなことをやっている奴らはいないから、よし行ってみようって言うってくれた。テレビ局から予算も出ているから、萱野さんのお礼や泊まる場所も手配するからといって車で迎えにいった。木を倒す前には「木の神様から丸木舟の神様が変わってください」と、今自分たちはこういうことをしてお願いしますと言って、木を切った。あとは残っている切り株に、「上はいただきましたけれど、根だけは残すから、ここに自分たちの子孫を残すために生き抜いてもらえませんか」、とお祈りをするんだ。それを全部萱野さんに教わった。それで1年かけて準備して、丸木舟を彫って、川を下って、魚とって、映像撮って、5日くらいで川を下ったんだ。それで、屈斜路湖から川を下ってきて、最後、釧路で幣舞橋の下を通ったとき、橋にある乙女の彫刻¹¹⁾の下を通ったのが感動的で。その様子を写したテレビで使った音楽も俺と豊岡で録音して作ったんだ。

——：東京にも結構頻繁に行っていたんですか？

千家：行ってた、行ってた。私なんて東京だけでなく九州や四国まで車で10回くらい行った。ユーカラ座でアイヌラックルをやったやつは、美輪明宏が東京の銀座7丁目で「銀巴里」っていう喫茶店で歌を歌ってた時、気に入られて時々行ってたんだ。いい男でさ。東京の作曲家とかに呼ばれて歌の勉強もしてたんだ。その人が東京によく行っていたから、私も行って。銀座7丁目では、北海道でラーメンを60円で食える時に、コーヒー1杯400円だった。そいつと一緒に3人か4人で東京行って高いコーヒー飲んでいたら、美輪明宏が出てきてそいつに向かって手を振るんだ。終わった後も、なんでも好きなもの食べてくださいって。

——：これはパリに行く前ですか？後ですか？

千家：たぶん前だなあ。俺は東京のこととか、パリに行く時には知っていて行ったから。マンガ家の赤塚不二夫さんも阿寒によくきたから¹²⁾、東京に行ったらホテルに泊まんないで、赤塚不二夫のところに泊まっていたの。こっちに来るときには釧路空港まで迎えに行ったら阿寒湖まで連れて

きて、摩周湖、屈斜路湖、知床、羅臼、網走、稚内のほうもずっと北海道中回って赤塚さんと勉強して。テレビ局が赤塚さんに、北海道行ったら写真や映像とってきてちょうだいって、出たばかりの新しい機材を貸してくれて来たんだ。それをもってきて、「盛さん、このカメラあんたが上手いから撮ってくれ」といってよこした。それをもって網走では網走刑務所行って、赤塚さんが囚人用の風呂に入ったふりをするのを撮ったり、オンネトーの温泉で撮影したりしてたんだ。それで赤塚さんと半月くらい回って歩いて、帰る時になって、カメラから三脚から全部あんたにやると言って置いて行ってくれた。

——：屈斜路のジャズフェスティバル¹³⁾があった頃の話ですか？

千家：それ(フェスティバル)を考えたのが赤塚さんで、一緒にやったのが豊岡と私。そこで九州やいろんなところから来た音楽家が演奏するところに、私はムックリで出たんだ。最初阿寒でやるかといっていたんだけど弟子屈にした。これ(音楽祭)も、ムックリも川下りも、みんなおんなじようなもんだ。赤塚さんと一緒にやった映像とかそういうのがあったために、(音楽祭もパリ公演も)なんとも(特別なことだと)思わない。普通にやってるんだ。

——：千家さん、楽しそうですね。パリに行ったり、赤塚さんと北海道中回ったり、ジャズフェスティバルやったり。

千家：そりゃたのしいさ。東京オリンピック(1964)にも行ってアベベ(選手)と一緒に走ったんだ。新宿の橋の上で。韓国のオリンピック(1988)も見に行った。ここ(阿寒)では家族とか雇った店員が木彫りを売ってたから、俺が出て歩いててもどんどん売れていくんだ。

——：最初にヨーロッパに行った時は、炭鉱で働いたお金を貯金して、必死でお金集めてという感じだったのに！最後に、ユーカラ座の台本の元となったユーカラは、山本多助さんが書き起こしたと伺いました。

千家：私は春採の生まれで、すぐそばに多助さんがいた。そして息子たちもその時から仲が良かった。うちの親父は釧路の千代の裏で漁師の先導をやっていて、近所の子供達に魚を持って行ってやっていた。シャケとかは釧路で売るけど、

ニシンだのさんまだの残ったのをあげてやってた。だから船が戻ってくる頃になったら子供達がみんな船を待って海岸にいた。だから山本多助さんも私のことを可愛がってくれた。それでアイヌ文化のいろんなことを教えてくれたからみんなに尊敬されていたんだ。

——：山本多助さんもパリ公演に行っていますね。冒頭に登場して、ユーカラを炉縁で語るシーンがありましたが、舞台では実際に喋っているんですか？

千家：声を出して言うてはいるけど、最初やる時に録音したやつも流してる。口パクだったらバレるんだ。だからちゃんと(言葉を舞台で)言うんだ。それでこの人は代わりがきかない。この人がいないからっておんなじようなことを他の人はできないんだ。

——：ユーカラ劇の映像を拝見したら、多助さんたちは、人形浄瑠璃の太夫みたいに舞台袖に台があってそこに座っていましたね。

千家：ヌサの前にね。このヌサもイナウも全部私らで作ったんだ。(パリ公演で)劇が終わったとき、私は音響効果・照明のところにいるから、一番見えるところにいた。ピリカピリカの歌とか、雷の音とか、ここだと向こうの技術者に行って音を出してもらうんだ。最後、(公演が)全部終わった後、10分くらい、ものっすごい拍手が続いて。もう片付けるかなと思っていたくらいだけど、どうにもならなくて、「あっこれは録音しなきゃ」と思って、鳴らしていたほうのテープを外して、違うテープをばんっと入れて、拍手の音を録音したんだ。その録音だけでも5分くらい入ってた。終わって、記者団が20人くらい来て囲まれて、もう片付けなきゃなんないのに何しに来たのかと思ったら、「さっきの歌(ピリカの歌)、アイヌの人の音楽ですか？」と。「ユーカラ劇っていうアイヌのことをやってるんだから、アイヌの音楽だ」といったら、「違うでしょう、あれとおんなじ音楽が南フランスの少数民族の曲であるんです。おんなじですよ！」と言われて。私はアイヌの音楽だと思ってやってたけど、世界っていうのは繋がってるから、だから南フランスでもどこでも、そこで音楽があったら、それが北海道に来たかもしれない。音楽は世界をめぐるから・・・そうだあんたの携帯

で美空ひばりの「まりも哀歌」¹⁴⁾ っていうの流せるかい。これピリカメノコって(歌詞にあつて)アイヌのこと歌うもんだから、昔はレコードにできなかったんだ。俺はこれが好きで。流せるか。もうちょっと大きい音で。よし、ちゃんと聞けよ。これレコードになってないんだからな。

(「まりも哀歌」を二人でじっと聴く。了)

注

- 1) 北海道ユネスコ連絡協議会ウェブサイトによると、釧路ユネスコ協会は1950(昭和25)年設立、札幌、小樽について3か所目。(https://www.unesco.or.jp/hokkaido/list.html)
- 2) 鶴居村ウェブサイト「鶴居村の歴史」によると、ユネスコ村は1964(昭和39)年に「設置現地視察」が行われ、昭和53(1978)年に開設したとある。https://www.vill.tsurui.lg.jp/soshikikarasagasu/somuka/somukakari/5/718.html
- 3) 千家さんは「阿寒湖アイヌコタン」のことを「アイヌ部落」と言われていたので、そのまま表記する。
- 4) 1967年の「北海道ユネスコ大会」か。(北海道ユネスコ連絡協議会 https://www.unesco.or.jp/hokkaido/activities.html)
- 5) 本稿のアイヌ語表記は、ユーカラ劇の台本に記載されているものに準じた。
- 6) 北海道新聞(1970(昭和45)年2月26日)「ユーカラ劇も上演<アイヌ観光センター>阿寒湖畔に5月オープン」：記事には「アイヌ部落の人たちが資金を出しあい、会社を設立し、自分たちで運営するセンター。(略)チセが小さいため団体観光客ははいり切れず、素通りしてしまう人たちが多い。この悩みを解消しようと計画された(略)一階では民芸品の製作実演と販売、二階大広間で食事を出し、舞台上でアイヌ踊りを上演する。」とあり、ユーカラ座の稽古が進んでいることについても記載がある。
- 7) 1964年に海外旅行が自由化され、1965年5月には日本航空のバリ線が開通。同年、国内企業では初めてのパッケージ旅行として販売された「ジャルパック」を利用して2000人以上が欧州やハワイを訪れた(日本航空(2014)、「まだ見知らぬ空へ」『会員誌 アゴラ』(2014年1月・2月号:262))。
- 8) 1946年にシャンゼリゼ通りに開業した伝説的なキャバレー。2022年にキャバレーとしての営業を終了した。(産経新聞2022年5月13日「伝説のキャバレー終業へ バリのリド、劇場に」)
- 9) 保存会の年表によると台湾公演は1986年。
- 10) この様子は、「驚異の世界『タイムトンネルをくぐる!! 丸木舟159キロの大冒険』」と題した番組に記録されている。同番組は1980年にテレビ技術賞を受賞しているので、プロジェクトは1979年か。(一般社団法人日本テレビ技術協会 https://mpte.jp/outline/kennsyon/technology.html)
- 11) 市民運動の末、4体の乙女の像が1977年に設置されたばかりであった。萩本和之「探訪北の風景21 4体の乙女・道東の四季像 市民運動が結実した幣舞橋 釧路市」『北海道自治研究 2015年12月(No.563)』北海道地方自治研究所。
- 12) 赤塚不二夫のウェブサイトにある日記によると、阿寒湖に通い始めたのは1970年代のよう。(赤塚不二夫公認サイト「これでいいのだ!!」 https://www.koredeiinoda.net/nikki/2001-11/20011114.html)
- 13) 1983年と1984年に開催された「カムイドラノ屈斜路湖ジャズフェスティバル」のこと。
- 14) 1963(昭和38)年収録、1990年に未発売曲集として発表された。